

対人恐怖心性をもつ人の居場所のなさについて

About the lack of "ibasyo" of persons with social phobic tendency

須藤 優希

Yuki Suto

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻 修士課程

キーワード：居場所，対人恐怖心性，自己愛

Key words : Ibasyo, Social phobic tendency, Narcissism

1. 研究目的

近年「居場所」概念が注目されている。そもそも居場所とは、辞書的な意味においては「居るところ」であるが、心理学における居場所は物理的意味だけでなく、心理的意味も含んでいる(庄司・杉本,2006)。

居場所研究は近年多様な視点から行われている。居場所研究が増加したきっかけとして、文部省の提唱がある(石本,2009)。文部省(現：文部科学省)(1992)は、不登校対策として学校が児童生徒にとって自己の存在感を実感でき、精神的に安心できる『心の「居場所」』の役割を果たすよう、学校、教師に提唱した。居場所概念が提唱されるまで、不登校(当時は登校拒否)の対応は、教師、養護教諭、スクールカウンセラーによる訪問面接(長嶋・大野・金森,1986)やフリースクール(石本,2009)、情緒障害学級における小集団での治療的かわりや教育相談での支援(三浦・鈴木・外山,1987)などであった。

文部省の提唱以前での不登校、心理学における居場所研究は、東京シューレのようなフリースペースに通う不登校の親の報告や活動報告が見られるのみである(石本,2009)。1985年半ばにおいては、居場所といえばフリースペースやフリースクールを指しており、学校以外の居場所として注目されていた(荻原,2001; 石本,2009)。

石本(2009)は、居場所研究を概観し、不登校や心理臨床の研究内では居場所は対人関係(物理的な場所ではなく親密な人と一緒にいること)を主軸としているとした。また石本(2009)は、居場所では「ありのままにいられる」という本来感、「役に立っていると思える」という自己有用感が生じるとし、これを居場所感と呼んだ。居場所感

や尺度の構成因子は研究によってさまざまであり、西本(2014b)は、居場所感の構成要素について明らかにするために居場所研究を概観し、居場所感尺度の項目を分類した。その結果、「被受容感(他者からの受容)」、「緊張からの解放(安心感)」、「本来感」、「自由の確保」、「自己存在感(自己肯定感)」、「自己有用感」、「充実感(達成感)」、「高揚感」、「連帯感」、「場との一体感」、「内省」、「成長感」に分けられた。

居場所研究の臨床的意義：村瀬ら(2000)は、通所型中間施設に通う思春期、青年期について研究を行った。この研究にて対象としている施設は「心の拠り所となる物理的空間や対人関係、もしくはありのままの自分で安心していられる時間を包含するメタファー」である居場所を提供することを目的としている。質問紙調査の結果、「友人からの承認」「友人ができる」「職員からの承認」「学校との連携」という「居場所づくり、仲間づくりのための援助」因子が、「本人の洞察が進み、自信が回復し、症状や行動に変化が見られる」という本人の変化に影響を与えることを明らかにした。また同じく村瀬ら(2000)の事例では、この中間施設が彼らのペースを尊重しつつ、社会へ開かれていくためのさまざまな資源を備えた居場所になったことで、青年の立ち直りがなされたとしている。

以上のことから居場所を提供することが思春期、青年期の問題行動の改善や社会生活への適応に大きな影響を与えることが考えられる。

居場所のなさ：このように、居場所については数多く研究がなされているが、居場所のなさにつ

いては十分な研究がなされていない(石本,2010; 西中,2014)。しかし,北山(1993)は居場所がなくなって初めて居場所を認識することを示唆しており,「居場所のなさ」を研究することは「居場所」概念の理解につながる(中藤,2016)。また,石本(2009)は「居場所のなさ」を訴える人への介入を行うには,「居場所のなさ」に結びつく要因を明らかにすることが必要だと述べる。

心理における居場所について最早期の研究が北山(1993)であり,彼は,居場所のなさについても述べている。北山(1993)は,居場所のなさについて,エディプス葛藤における「去勢不安」や三者関係の視点からとらえており,また「自分がいない」ことが「居場所がない」と語られることがあるとした。

居場所のなさについての実証的研究は堤(2002)がある。堤(2002)は,「居場所がない」感覚尺度を作成し,「自分が周りの人の輪に入れない」や「自分が周囲に受け入れられないと感じる」などの「対他的疎外感因子」と「おちこんで精神的につらいと感じること」や「一人でいてさみしいと感じること」などの「自己疎外感因子」の二つに分けた。また,「居場所がない」と感じる感覚は自我同一性混乱と相関があることが明らかになった(堤,2002)。中藤(2013)(中藤,2016より引用)は居場所のなさについての研究を行い,居場所のなさを「他者への非親和的印象」,「他者とのへだたり」,「いることのゆらぎ」,「不快な自己感覚」,「回避的対処」という6つのカテゴリに分けた。

「他者への非親和的印象」は「集団の他者の得体の知れなさ」「集団の他者との異質性」「集団の他者への否定的印象」という3つの概念から構成されている。「他者とのへだたり」は「評価者としての集団の他者」「集団の他者からの疎外感」という概念からなっている。「いることの揺らぎ」は,「集団にいることの必然性のなさ」「集団での居場所がなくなる不安」という概念からなる。「不快な自己感覚」カテゴリは「不快な身体感覚」「自分らしくない感覚」という概念からなる。「回避的対処」じゃ「集団の他者に合わせたあり方」「集団の他者とのかかわりの回避」という概念からなる。この研究から,中藤(2013)はある集団が個人にとって「居場所」として主観的に体験されるためには「異質性」を減らすこと,「他者から否定されないこと」,「いることが保障されること」の3つ

の条件が必要なことを考察している。

居場所のなさと**個人要因**:居場所のなさはだれでも生じうる状態ではあるが,居場所のなさを感じやすい個人要因があるのではないだろうか。たとえば居場所のなさ個人要因は清水(2012)が思春期的心性をあげている。また,清水(2012)は同研究で「慢性的に感じる「居場所のなさ」感」があることを明らかにして、個人の中に居場所のなさを感じるものがあることが示した。居場所のなさについての研究を概観した中藤(2016)もまた,個人のパーソナリティとの関連において「居場所」の見出しづらさや得づらさがあるのではないかと考察する。居場所のなさ個人要因の関連性を考えることは,支援や援助の場を頼ることができない,つまり居場所と感じることが難しいクライアントを知るうえで有用である(中藤,2016)。

対人恐怖心性と**居場所**:居場所概念が日本において普及したことについて,対人恐怖が日本に多いことが関係しているのではないかという推測がある(中藤,2016)。渡邊・岩瀧・山崎(2018)は病態水準に満たない対人恐怖傾向であるシャイネスと居場所感について調査を行っている。その結果,友人のいる居場所において「被受容感」を感じられることはシャイネスの「行動的側面<消極性>」を低減させていた。

しかし,居場所のなさ対人恐怖心性との関連を述べた研究は今まで見られていない。

対人恐怖は,対人場面で強い不安,緊張が生じ,人から変に思われることを恐れて対人関係を回避する傾向を持っていて,他者への恐れや恥に対する,過敏性を特徴とする(清水・川邊・海塚,2008)。対人恐怖心性は,自己愛傾向とともに語られる。清水ら(2007)は対人恐怖心性自己愛傾向2次元モデルを作成した。特に対人恐怖心性が高い群については自己愛傾向が低い「過敏特性有意型」と自己愛傾向が高い「誇大-過敏特性両向型」の二グループに分けた。

また,清水・川邊・海塚(2008)は,このモデルを用いて精神的健康との関係を明らかにした。その結果,「過敏特性有意型」は抑うつ・不安,無気力得点が高かった。その一方で「誇大-過敏特性両向型」は抑うつ・不安,不機嫌・怒り,無気

力得点が高かった。このように対人恐怖といっても自己愛の高さによって精神的健康には差異があることが明らかになっている。

そこで本研究では、対人恐怖心性（誇大—過敏特性両向型，過敏特性有意型）と居場所のなさのそれぞれの関連および対人恐怖心性を持つ人の居場所のなさの要因について明らかにすることを目的とする。

2. 研究実施内容

目的：青年期における対人恐怖心性と居場所のなさの関連性および、対人恐怖心性における居場所がない感覚について明らかにする。

対象者：大学生 200 名程度

方法：質問紙法

質問紙構成

①対人恐怖心性—自己愛傾向 2 次元モデル尺度短縮版 (TSNS-S) (清水・川邊・海塚 (2008)) 20 項目 7 件法

②「居場所がない」感覚尺度 (堤,2002) 23 項目 4 件法

③「居場所がない」と感じる時はどのようなときかについての自由記述

④「居場所がない」ときの感情を自由記述

⑤フェイスシート 年齢，性別

分析方法：t 検定，重回帰分析を行うことを予定している。自由記述部分においては M-GTA 法を行うことを考えている。

3. まとめと今後の課題

先行文献より、居場所のなさについて実証的研究を行い、居場所のなさの構造や居場所のなさを感じやすい個人要因について明らかにしていくことが課題だと考えられる。今後は 6 月に調査実施を目標に研究準備を進める。

4. 付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所平成 30 年度大学院生研究助成(B)「グループ活動における居場所感の変化および精神的健康との関連性(課題番号 DB3014)」より研究助成を受け行った。

主要参考文献

石本雄真(2009). 居場所概念の普及及びその研究と課題, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, **3**(1), 93-100.

石本雄真(2010). 青年期の居場所感が心理的適応, 学校適応に与える影響, 発達心理学研究, **21**(3) 278-286.

北山 修 (1993). 自分と居場所, 岩崎学術出版社. 文部省(現: 文部科学省)(1992). 我が国の文教政策 (平成 4 年度), **3** (4) .

中藤信哉 (2012). 「居場所のなさ」についての研究, 京都大学大学院教育学研究科紀要, **58**, 209-220.

中藤信哉 (2016). 心理臨床と「居場所」, 創元社. 西中華子 (2014a). 居場所づくりの現状と課題, 神戸大学発達・臨床学研究, **13**, 7-20.

西中華子 (2014b). 児童期・青年期における居場所に関する一考察: 居場所感の視点から, 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, **8**, 151-164.

清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 (2008). 対人恐怖心性—自己愛傾向 2 次元モデルにおける性格特性と精神的健康の関連—, パーソナリティ研究, **16** (3), 350-362.

清水寛子 (2012). 中学生の「居場所のなさ」に関する研究, 佛教大学大学院紀要教育学研究科編, **40**, 71-88.

杉本希映・庄司一子 (2006). 居場所の心理的機能の構造とその発達の变化, 教育心理学研究, **54**, 289-299.

堤 雅雄 (2002). 「居場所」感覚と青年期の同一性の混乱, 島根大学教育学部紀要 (人文・社会科学), **36**, 1-7.

渡邊美咲・岩瀧大樹・山崎洋史 (2018). 心理的居場所感が対人ストレスコーピングに与える影響—青年期のシャイネスに注目して—, 群馬大学教育実践研究, **35**, 337-346.